

## 英国のジュニア選手の育成と選手発掘について — Richard J Fisher 教授の講演を踏まえて —

静岡大学	伊藤	宏
蘇南中学校	岸	栄二
埼玉大学	有川	秀之
明海大学	岡野	進
北海学園大学	竹田	憲司

### The selection and development of young people who are talented in sport in England

Hiroshi ITO

Eiji KISHI

Hideyuki ARIKAWA

Susumu OKANO

Kenji TAKEDA

#### Abstract

This paper has been tried to add to the debate on the selection and development of talented young people in Japan by utilizing evidence from Europe in general and the United Kingdom in particular by R.J. Fisher. Several of the projects are very new and he will be happy to provide further details as they emerge.

The research by the English Sports Council will include an international review of talent identification methods and this will be available some time this year. The most important part of the message is that the sport of athletic and PE in schools must work closely together in the interests of young people, something that will also help the sport itself.

#### はじめに

スポーツに才能のある子供たちを発掘しと育成することは、重要かつ複雑であって、興味深いトピックであるが、同時に広範囲な問題点をも含んでいる。一般的に、ジュニア選手が将来の可能性・潜在能力を持っているかどうかについて見極

めるためには、今のところそのまま見守ることも一つの方法である。本当に才能を持っている子供を識別することは非常に難しい。ある場合には、国家の威信から、あるいはコーチ間の利害関係から、若い選手達が犠牲になったり、時には児童虐待に繋がりがねないシステムが今までにとられたこともあった。

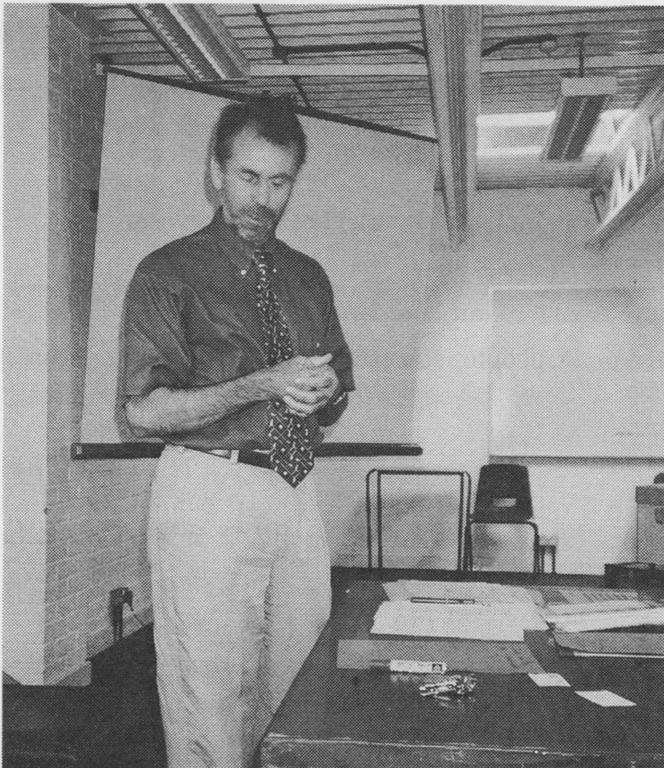
この論文では、将来チャンピオンになる可能性を持つ子供の発掘と養成のための適切なモデルの開発とそのための重要な問題点を提案する。現在、幾つかの方法がこのモデル中で用いられているが、結果的に現在は、学校体育と社会スポーツの指導者が一緒に考え、共同で解決していくことが求められている。

ヨーロッパで試みられ、英国 (United Kingdom) でも行っている方法と日本の方法とを比較することは、ちょうど英国が非常に成功したヨーロッパ選手権直後なので、有用であろう。

一般的には、ジュニア選手の幼年時代と青春期には、彼らを取り巻く文化的、社会的、政治的な背景が圧倒的な影響力をおよぼす。

一般的な考えは普及されているが、いくつかの考えは容易に受け入れられない面もある。いずれにしてもそれらは私たちの知識限界を拡張してくれる側面も持っている。

とにかく、子供たち、そして若い人々と一緒に始めることがもっと良いことである。10年前に、スポーツ科学と体育 (Physical Education) の国際評議会 (CSSPE) が発展途上国に一般的なガイドラインを提示するために専門家グループを



講義中のフィッシャー博士

召集し、これらの問題を調査した報告書が (フィッシャー; Fisher と Borms, 1990年参照) 出版された。

その報告書では、若い才能を育成するに際して多くの心配点を強調されている。特に若い選手のバランス感覚を保持することの重要性については強く指摘され、次の点が強調されている。

1. 早い専門化を避けること
2. 計画的な試合を設定すること
3. 知識に裏付けられた技能の発達を重視すること。

以上の点を強調したにもかかわらず、最近の英国スポーツ評議会の報告によれば、ジュニア選手のための競争的な試合の回数が増加傾向であるとしている (1995年)。

実際、多くのナショナルレベルのコーチが、陸上競技とサッカーを例にあげて、若い選手を対象にした競争試合の数を減らすことを勧めており、その代わりに、子供時代と青春期の大切な期間での勝負を意識するよりも、技能を身につけることに全力を注ぐことを勧めている。

イングランド (England) がサッカーの世界ユース選手権 (World Youth Cup) の優勝を勝ち取ることに専念しているときに、オランダのコーチ; リナス・ミッチェル (Rinus Michels) はタイム誌 (The Times) に論文を発表し、イングランド (England) は常にジュニアレベルにおいてオランダのチームを破ることに全力を挙げているが、この結果は、シニアレベルでの成功に大した重要性を持っていないと指摘した。

フットボール協会 (Football Association) のラッセル (Russell 1996) は次のように断言している。

フットボール協会が8年間にわたってFA学校の優秀な選手について、250項目以上の総合的な健康診断を行った結果、広範囲なトレーニングと競争スケジュールを過度にし続けると若いプレイヤーは損傷する危険性に曝されることを提示した。

才能ある若いプレイヤーが1年に100回のゲームを行うのは異常であることが明らかになったのである。

その結果、フットボール協会 (Football Association) がすべてのジュニアサッカー選手に試合数を選択できるように新しい権利を許可した。

また、アメリカのテニス界も、たとえ成功率が1%に満たないにしても、それが有効なシステムだとして、何千もの若い人々を育成している。

最近の調査 (Simmons 1995) によると、1986年からUKの少年少女13人の運動選手を追跡調査をしてみると、10年後にただひと握りの子供だけが国際的な運動選手になっていたことが判明した。

ブラウン (Brown 1992) は、英国のジュニアの優秀な中距離走者を追跡調査してみると、ヨーロッパジュニア選手権 (European Junior Championships) の5000mのメダリストは1人も生まれていないが、その後のヨーロッパシニア選手権の5000mの決勝には何人かのシニア選手がメダルを獲得していたということを明らかにした。

英国の陸上競技の前上級コーチ、フランク・ディック (Frank Dick) は、1992年に、1988年の世界ジュニア選手権 (Championship) に出場した選手の25%はその後スポーツを止めてしまったと報告している。

フランス (France) とドイツ (Germany) 両方のエリート養成システムでもヨーロッパ (Europe) で類似の例を見いだすことができる。

レイリーとサットン (Reilly and Stratton 1995) は、UKのより基本的な段階において、10歳の子供たちが彼らの自由な時間のおよそ30%を専門的な訓練に使っていると報告している。

『明らかに、このような刻苦勉励を強いるトレーニングプログラムは子供たちの将来性とやる気を保証することを困難にしている。あまりにも頻繁なトレーニングによって引き起こされる筋肉・骨格系の障害あるいは心理上の燃えつき症候群は見落とされる傾向があるが、それらの現象はコーチと両親の双方の性急な期待によるものであることが挙げられる』。

これは憂慮すべき話題であり、そして今も起っているのである。

しかし、子供と子供のスポーツの特性に焦点を合わせて多くの研究をしているリー (Lee 1993)

らの報告によれば、このトピックの否定的な局面が強調されすぎたり、重要な改良点が無視されている面もあると指摘している。

次に、才能がある子供たちとジュニア選手の選抜 (selection) と育成について実際に用いられている方法や若い選手の選抜に対して提案されている幾つかのモデル、そして実際の選抜過程について見解を示そう。

## 才能選抜モデル

東ヨーロッパ (Eastern Europe)、特にソ連 (USSR) そしてドイツ民主主義共和国 (GDR) がタレント発掘に取り掛かったのはそれほど昔のことではない。

年齢区分を設けているスポーツ学校では、普通学校に在籍している児童・生徒を対象に国家規模での健康と体力検査やスパルタキアード (Spartakiade) のような試合を通して大規模な診断・選抜を行って、発掘を行ってきた。

しかし、ベルリンの壁 (Berlin Wall) が取り払われて以来、これらのシステムは本当に社会的にも、そして経済的にも労力と負担が掛かりすぎるものになってしまった。

リオードン (Riordan 1992) は、ソビエトのオリンピックでメダルを大量に獲得したこれらのシステムはゆがめられたプライオリティを示すものだったと述懐している。

GDRのナウル (Naur 1992) とベレットシュナイダー (Brettschneider 1992) とリオードン (Riordan 1992) は、USSRの成功は、単に「みんなのためのスポーツ (Sport for All)」として広いベースの上に成功が築かれたのではなく、実際には一般人のスポーツがいろいろな意味でエリートのニーズに犠牲にされたものであったことを示した。

両国のシステムは、同じイデオロギーだったにもかかわらず、学校体育での設備・施設の準備状態は不十分で、一般的な住民のための設備はエリートのために後回しにされていた。それらは比較的限定された範囲の中でその事業は成功を成し遂げたものであったが、それらがより一層社会的

に受容される方法で、同様な結果が得られるような選手の発掘方法であるかどうかについて確認することはできない。

これからは、学校スポーツと社会スポーツを連携させ、そして、若い人々に広範囲な機会を提供し、個人がスポーツに自由に参加出来るようにすることが、ペストラ (Pestola 1992) ・フィッシャー (Fisher 1996) らによって提唱・推進されたモデルであり、学校の内外に数多くの機会を設けておくことの重要性が叫ばれている。

彼らの戦略は (図1 参照) いくつかの重要な原則の上に成り立っている：

- (i) 学校で行う仕事は、12歳までの早い段階と13歳から16歳の第2段階とを結びつけ教育をすること
- (ii) フィッシャー (Fisher) と Borms (1990) と Sobral (1994) らが明らかにした一般的なテスト項目 (身体, 性格, トレーニング用) を利用すること。
- (iii) 多くの場所で練習に参加できる可能性を維

持すること。学校とクラブの間で常時往復できる関係を保つことが大変重要である。

若い運動選手対象の才能発掘システムの研究 TOYA (the Training of Young Athlete Study 1992) によると、英国で行われたタレントの発掘とその応用は用いられなくなってきている傾向があると指摘している。

そのシステムが実際に良いか否かにかかわらず、一度、選抜方法をミスしてしまうと、そのシステム自らを終了させることは難しいからである。

同様に、Sedlacek ら (1992) が、チェコスロバキアは高度に発達したスポーツシステムを構築しており、相互に調整するシステムと巨大なネットワークを持っており、お互いをサポートしていることを指摘している。

これらのネットワークには優秀なスポーツ成績を示した学校体育 (PE)、スポーツ学校、青年トレーニングセンターを包含している。

さらに、最近はクーク (Cooke 1997; 前イギリス (England) ラグビーのコーチ) は少し異なっ

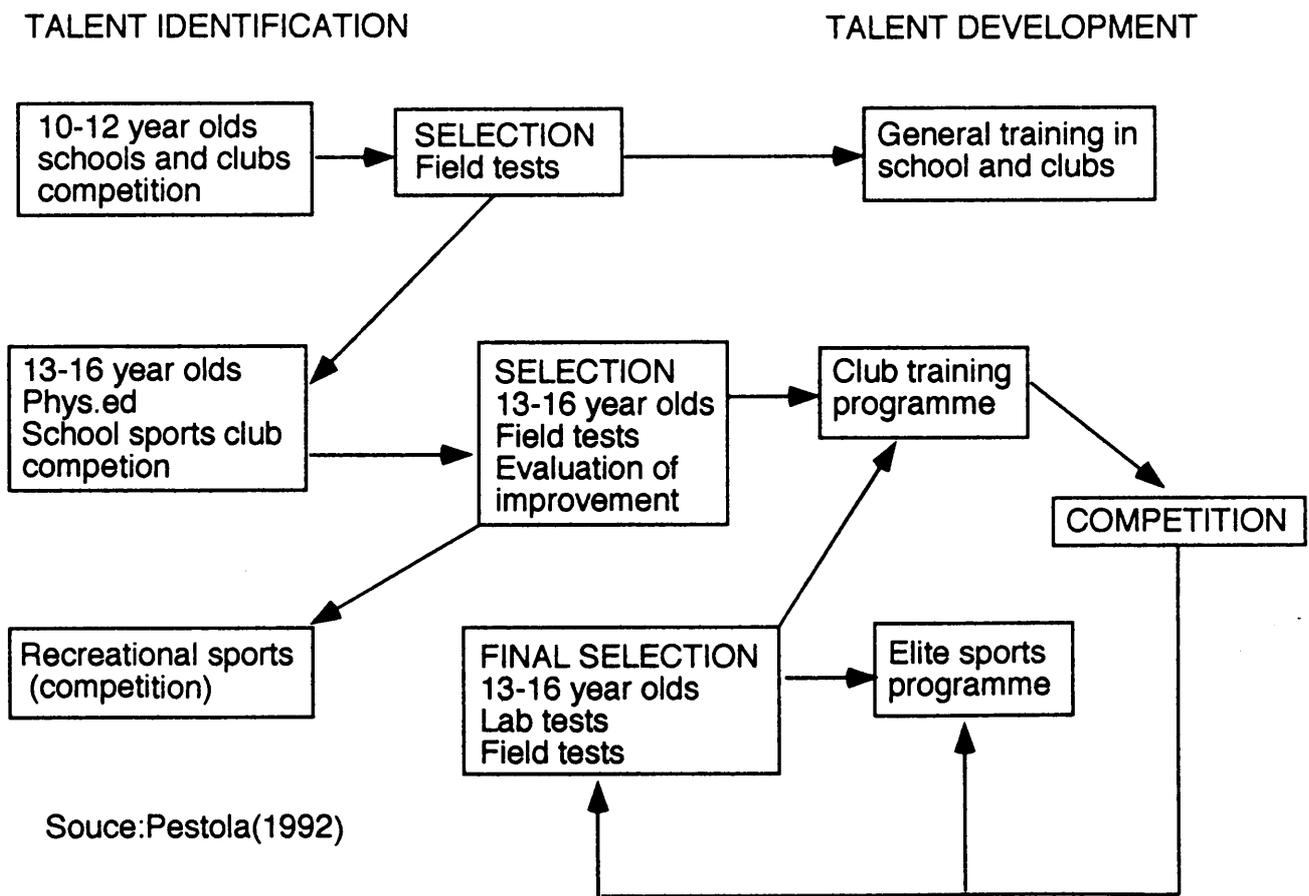


Fig. 1 Talent Identification and Talent Development

た方針をとり、そして才能開発のための新しいモデルを発展させた。

彼はスポーツ発展概念についての基本的な捉え方を採用した。

基礎 → 参加 → performance → 優秀

この概念は、1995年のリスボンの会議 (Lisbon Conference) において、ヨーロッパの青年スポーツ憲章 (Youth Sports Charter) に採用され、英国で発達したものである。

彼は、このシステムを極端に単純化し、そして彼はこのシステムを「スポーツの構図」と命名した。

基本的な運動能力の土台は小学校を通して確立され、そして中学校の初期の段階で学校体育授業カリキュラムを通して作られる。

しかし、明らかにこのシステムには問題点も多い。ヨーロッパの体育協会 (European Physical

Education Association) の最近の調査 (1997) によると、ヨーロッパ (Europe) の多くの国では、初等教育段階での教育の専門家の欠如が指摘されてきている。

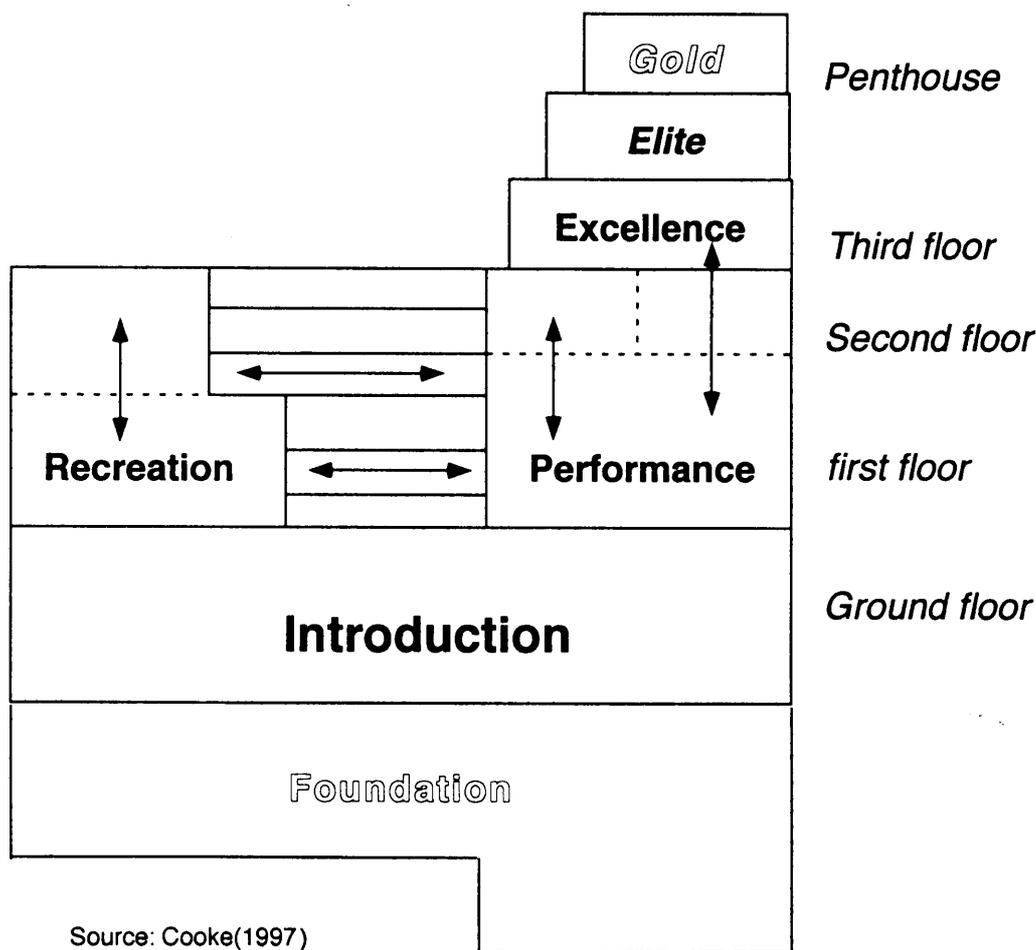
スポーツの構図の最初の段階では計画的にスポーツが導入される。そして、それは学校体育でも同様に導入される。

次の段階では、レクリエーションコースを選ぶかパフォーマンスコースを選択するかの二つのコースが設けられる。

後者は完全にクラブを代表する選手養成のシステムになるであろうし、これらの2つのコースを明確に関連づけておく事は必要である。

さらに次の段階では、レクリエーションとスポーツの間のギャップは広がる。なぜなら、エリート選手が出現し始め、その先はもっと将来を踏まえたレベルが設けられているからである。

第3段階にはレクリエーションスポーツはなくなる。そして、ここからは優秀な国を代表するレ



Source: Cooke(1997)

Fig. 2 The House of Sport

ベルに到達した選手たちが対象になる。これは雑誌などの写真で見ると、多くの競技者の頂点を表す。パントハウスはスポーツのエリート段階であって、そして世界中で最良の選手たちだけが含まれることになる。ここではほんの少数の選手のみが勝利者として注目されている。このモデルが構築されて直ぐに、1996年に始められたイギリスのスポーツ評議会 (English Sports Council) の才能開発 Project が、ちょうど結果を出し始めた。

プロジェクトの目的は次の通りである；

○社会的にも、それを取り巻く環境的にも、そして組織的な制約に対して、もっと良い理解が得られるようにすること。

○そうすることによって、個人のスポーツ成績を向上させるチャンスに影響を与え、結果としてスポーツのレベルを高めることにつなげること。

重点11種目のスポーツにおける諸要求とコーチや運動選手の経験についての詳細な研究を実施することがトップレベルの成功を成し遂げる機会を広げ、発展させることになる。

データはエリートであると判断された選手たちと準エリートの競技者を対象にして「研究グループ」での論議を通して集められている。

1434人の選手を対象に質問紙調査がなされ、64%にあたる914人の選手から回答が得られた。

1997年の8月の段階で、第一報の指標が報告された。それらは興味あるパターンを提供し、選抜の基準を明らかにした。

第一に、社会的な特徴として、これらスポーツでのエリートと準エリート選手は一般人の規準より高いレベルの成績を持っている傾向が見られたことである。例えば彼らの3分の1が学位あるいはより高い全国的な卒業証書 (Higher National Diploma) を持っていた。表1参照

この研究で調査された対象が、より高い社会的、経済的なグループに所属している傾向もあることが明らかになった。この事は、英国における若い才能ある選手の育成に社会的な理解を得るのに有効に働くと思われる。

明らかに、これは個人的な能力よりも他の条件で才能を埋没してしまうのか、才能を有効に生か

すかの配分条件に重要な意味を持っている。

またこの研究は、それぞれの段階での試合経験を比較したり、観察することで、試合への参加、競技成績とよい資質を示めず時期についても利用される。

初めに、選手はそれぞれの段階で年齢を重要視する傾向が見られる。導入段階では (学校、大学あるいはクラブチームには主に楽しみとして参加すること)、参加者の平均の年齢が表2で見られるように、11才6ヵ月であった。

参加年齢は水泳の8才6ヵ月から、ラグビーの14才11ヵ月であることを示している。

しかしながら、これはこの時点で我々に子供がそのスポーツを専門的に取り組んだのか、あるいは広範囲の運動 (activities) を試みているかどうかは明らかになっていない。

我々のナショナルコーチの多くが、表2に示されるように、陸上競技など、あまりにも早期専門化することについての危険を指摘している。スポーツに取り掛かる影響力については、父親の影響が最も大きく (事例の40%) ことが分かった。次に29%は学校によるもの、その次は母親によるもの (23%) であった。

しかし、わずか13%のみが自身の意志によるスポーツ参加であった。

競技者レベル (シニアクラブで国あるいは地域のレベルの試合参加) においては、全競技者の平均年齢は16才1ヵ月であり、ラグビーの20才10ヵ月から水泳の12才6ヵ月までの範囲が見られる。表3参照

これらの競技選手の大多数 (69%) はクラブのコーチからコーチングを受けており、スウェーデンの若いエリートのテニスプレーヤーを研究している Carlson と Engstrom ら (1987) によると、選手達には試合のサーキットや厳しいトレーニングを開始する前には、快適さと個人的なサポートが与えられており、これらが非常に有利に作用していると判断されている。

才能がある子供を指導しているコーチに関係する多くの著書については Crisfield (1992) によって整理されている。それらによると、エリート選手の7%はナショナルコーチらによって指導さ

Table 1 Educational Qualifications

Highest Qualification Achieved	Elite Competitors(%)	GB population*(%)
Degree/HND	32	19
A LEVELS/ Highers	31	12
GCSE / O Levels(Grade C or above)	27	22
GCSE / O Levels(Grade C or below)	5	11
No Qualifications/ Other	5	33

\* 1993 General Household Survey

Table 2 Age to Start Sport

sport	Average Age
Rugby Union	14 yrs 11 months
Rowing	14 yrs 2 months
Cycling	13 yrs 1 months
<b>Athletics</b>	11 yrs 8 months
Hockey	11 yrs 0 months
Criquet	10 yrs 10 months
Netball	10 yrs 4 months
Rugby League	10 yrs 0 months
Sailing	9 yrs 8 months
Judo	8 yrs 8 months
Swimming	8 yrs 6 months
<b>Average Age</b>	11 yrs 6 months

Table 3 Age at Start of Performance Level

sport	Average Age
Rugby Union	20 yrs 10 months
Rugby League	18 yrs 6 months
Rowing	17 yrs 10 months
Cycling	16 yrs 8 months
Criquet	16 yrs 8 months
<b>Athletics</b>	15 yrs 7 months
Hockey	15 yrs 0 months
Netball	14 yrs 6 months
Sailing	13 yrs 7 months
Judo	12 yrs 11 months
Swimming	12 yrs 6 months
<b>Average Age</b>	16 yrs 1 months

れ、5%はマンツーマンでコーチされており、そして4%が家族の指導によるものであった。

これらの競技選手の主なる不平不満 (dissatisfactions) に対しては、科学的なサポート (43%) とスポーツ医学の支援 (53%) が求められている。優秀レベル (最も高い国内、あるいは国際的なレベルの試合) に達する平均の年齢は、ラグビーでは23才2カ月、柔道では16才1カ月であり、全体では19才5カ月であった。表4参照

多くのスポーツで16才から19才までに優秀レベルに到達しなければならないという必要性を示めず明らかな根拠が見られないという興味ある記述があった。25年間にわたる明確な根拠から、次のような示唆を示している (Zatsiorskyら1973, Hemery 1986, Fisher と Borrns 1990, TOYA 1992)。

「焼き切れ」の可能性の危険を冒さないで、発育中の体を痛め付けないようにして、適切な年齢でバランスがとれたライフスタイルを保証する観点から早期化を避けることの重要性が提案されて

Table 4 Average Age of Reaching an Excellent Level

sport	Average Age
Rugby Union	23 yrs 2 months
Rowing	21 yrs 4 months
Criquet	21 yrs 1 months
Rugby League	21 yrs 0 months
Cycling	19 yrs 10 months
<b>Athletics</b>	19 yrs 6 months
Hockey	18 yrs 1 months
Netball	17 yrs 5 months
Sailing	17 yrs 11 months
Swimming	16 yrs 8 months
Judo	16 yrs 1 months
<b>Average Age</b>	19 yrs 5 months

いる。

成功の機会をなくさないで、これらを実行することができる勇気あるいはビジョンを持っているのだろうか？

## 選抜手順

表5で見られるようにイギリスのスポーツ評議会 (English Sports Council) の研究から専門競技実施グループ (パフォーマンス) とトップ競技者グループ (優秀レベル) の両方の選抜過程とその結果に目を向けることが、有効になる。

すべてのスポーツ種目で多くの生理学/心理学上のテストの評価方法が使われ、優秀な競技者には、例外も見られたが、両方のテスト結果のパターンには目立った類似性がみられた。

私の大学では、最近受け取った興味ある要請がありました。それは、体操のトップクラスの選手達から心理学テストを用いて将来チャンピオンになれない選手を取り除いて欲しいというものでした。

対象者はすべて8~11才の選手でした、しかし、我々はいくつかの理由のためにその要請を辞退した。

それは、とにかくこの年齢においてそうした目的のためにこのようなテストを使っても信頼性が保てなかったであろうし、それ以上に一層際立っていたのは心理学者のすべてが、それは非倫理的であると指摘し、第一に優先しなければならないことは子供であり、スポーツのためではないと指摘したことであった。

興味深い事に、その要請に親のすべてが同意していたことをコーチが指摘しており、それは親がコーチに大きな信頼を置いていたからであろう。

もう1つの興味深いプロジェクトがイギリス (England) で現在進行中であって、それは Weetabix 会社からのものである。

それはデイリー・トンプソンの Sport 番組で、子供の体力テストを対話型のコンピュータ分析によって子供がスポーツを行う際、どんなタイプの子がどのスポーツに最も適しているか予測するものである。

そのテストは11才~13才の年齢層を対象にしたものであり、それはオーストラリア人 (Australians) によって作られた才能開発システムで、実際、テスト法としては信頼性の高いものであった。基本的なテストの概要は表6に示されている。

それは崩壊前の旧東ドイツによって使用されたテスト法であり、旧東ドイツ国内のすべての学童に適用されたものであった。

それによって、才能があるとして選抜された選手達は1つあるいはそれ以上の特別な準備段階に移り進むことになる。しかし、この新しいプログラムは競技成果を支援するための組織的な支援と財源無しでは十分な効果をあげることは出来ないものであった。

Table 5 Selection Process

Selection Process	Selection Process Undergone (%)	
	To Reach a Performance Level	To Reach an Excellence Level
Achieved Constant Level of Performance	61	77
Took Part in Trial	60	80
Achieved Set Result / Scores / times	41	55
Was Identified by a Scout	20	20
Underwent Physiological or Psychological Tests	7	28
Other	4	5

Table 6 Sport I.D. Prediction Test (For Children Age 11-13 Yrs)

Test	Purpose
Height	Sports requiring balance, blocking ability, or vertical jumping.
Sitting Height	Sports needing proportional length of leg / trunk.
Weight	Sports related to weight or body mass.
Arm Span	Sports needing arm length (throwing, swimming).
Reaction Time	Sports requiring rapid decisions on reactions.
Tennis Ball Throw / Catch	Sports requiring tracking and intercepting of objects.
Basketball Throw	Sports requiring upper body strength.
Vertical Jump	Sports requiring differential height movements(eg. basket ,volleyball)
Balance	Sports requiring great balance.
Agility Run	Sports needing directional change.
40m Sprint	Power based sports.
Bleep Test	Endurance related sports.

同様に重要なことではあるが、才能発掘法はいろいろな意味で非常に複雑であり、予想できないことがあることも明確になっている。それで、才能発掘システムには上記のように、ペストーラ (Pestola) によって明らかにされたように多くの出口と入口を準備しておく必要がある。

この一連のテストは旧東ドイツの「発掘の第一段階」と呼ばれているものと同じもので、それはスポーツでの一般的な能力を測定するものである。

次に続くより優れた開発方法には早期発掘方法を補い、発展させる必要がある。

今の所、これらは上記に示されたようにかなり伝統的な傾向がみられる。

以上の方法とは別に、選抜のネットワークから漏れてしまった選手のために、時間をかけて育て、特定のスポーツに興味を持たせる時間を作るため、英国では全国コーチング財団 (National Coaching Foundation) によって発展させたチャンピオンコーチング (Champion Coaching) のプログラムを用いている。

これらの計画は時には学校をも含める各地域の公共機関に基盤をおいている。そして、それらは子供たちが今後より良く伸びることに人一倍興味を持っている外部のまたは特別のコーチを供給す

る。その人たちはすでに専門種目選手を指導している指導者ではない。

換言すれば、育成対象になっている子供たちとは、全国レベルまたは地域レベルでなく、学校でのクラブかあるいはその周辺のチームに所属している子供たちであり、主に競技に参加することを楽しんでいるレベルである。

英国では現在 (1997年9月)、143の計画が実施され、およそ1200人の子供たちが今年それらに参加している。

スポーツの歴史を紐解くと、そこには遅れてから優れた才能を発揮した立派な選手たちが多くいるという事実が見られる。

いずれにしても、ちょうどスポーツをしたいと思っている子供たちにコーチングを提供することはそれだけで十分に正当化されたものであろう。

## 結論/まとめ

この講義では、日本での才能ある若い選手達の発掘と発展方法について、特にヨーロッパ (Europe) での一般的な方法と特に英国 (United Kingdom) で用いられている実際の方法とを提供することによって討論を深めることを試みたものであった。

プロジェクトのいくつかは非常に新しく、そして、それらがより確固な内容として出現されることが望まれている。

イギリスのスポーツ評議会 (English Sports Council) の研究では才能発掘方法についての国際的な批評や再調査を含んでいるが、その内の幾つかは、今年中に応用され実施される予定になっ

ている。

この講義の最も重要な内容は、陸上競技としてのスポーツ活動と学校の中の体育活動 (PE) が子供を中心において、より一層一緒に働き合わなくてはならないということであり、そうすることによって、スポーツそのものが発展すると述べていることであった。